

英語教育學

教職科學講座
第18卷

松村幹男編

1990年5月20日 初版発行

教職科学講座
英語教育学 18

編者 松村幹男

発行者 福村 惇 一

発行所 福村出版株式会社

東京都文京区小石川一丁目三番一七号

郵便番号 一〇二

電話 (八二三) 三九八一

振替東京九七八三三

印刷・厚德社 製本・松栄堂

乱丁本・落丁本はお取替えいたします

© Mikio Matsumura 1990
Printed in Japan

ISBN4-571-10558-4 C3337

教職科學講座 第18卷

英語教育學

松村幹男 編

業學院圖書館
藏書章

福村出版

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利侵害となり、著作権法違反となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めて下さい。

まえがき

戦後、教員養成は大学において行うこととなった。その大学の教育課程のなかに「教科教育法」という授業科目が設けられ、英語科のばあいは英語科教育法と呼ばれ英語教員の資格取得に必修のものとなり今日に至っている。戦前には英語教授法などの名称で授業が開設されたところもあったがその数は限られたものであった。

1960年代のころから、英語教育はただ単に英語の教授方法だけを扱うという狭義のものから脱皮して、もっと基本になる理論をおさえ、それをふまえた教育実践を行おうとする動きが見られるようになった。また、経験に基づく教師個人のものから、実証的実験的な性格を含む認識が広がっていった。教育学部学生の卒業論文も英語教育について書かれる傾向が増大していったし、英語教育を専攻する講座やコースを持つ大学院が開設されるようになった。これらの動きの底流には英語教育を固有の学問研究の分野として展開しようとする「英語教育学」への志向があったのである。明治の時代には総括的に「英学」と称されていたものが、その後、英語学と英文学という専門分化を経験し、いままた、それらから分離独立した英語教育学の創成を見たのである。はじめの英学は英語学・英文学・英語教育学という3領域となり、相互に深いかかわりを持ちながら研鑽されるようになった。学問が本当に学問となるためにはこのような分化の道を辿らなければならない。これは歴史が教えるところである。また、諸外国においても同様の傾向を見出すことができる。TESOL（アメリカ）、IATEFL（イギリス）はその例である。

英語教育学は単に教え方だけを扱うものではないだけにさまざまな異なる研究領域を持っている。本書では大きくⅠ～Ⅲの3部構成とした。

まず、Ⅰ. 英語教育の歴史と教授原理では、教室の教育実践に入っていく前に

いわば原論的、原理的側面に光を当てることをねらった。

第1章では英語教育の歴史的背景とその展開を素描している。現在という時は決して偶然的に存在するものではなく、これまでの過去からの経緯と実績の上にある。それをふまえながらこれからの英語教育を探求しようとする。第2章ではこれまでの英語教育目的論をふりかえりながら、新しい時代に即応する目的を模索する。その新しい時代に適合するためにはどのような英語がどのような考え方のシラバスのもとで編成されるのがよいかを扱ったのが第3章である。次の第4章では言語習得とは何であるのか、如何にして言語は習得されるのかというメカニズムに迫る。教育の問題は学習者不在で攻究することはできない。第5章では英語学習者に的をしぼり、学習者中心の英語教育が論じられている。そして第6章では外国語各種教授法に加えて近年の新しいアプローチが述べられている。

次にII. 授業の実践はテスト・評価も加え5つの章で構成されている。第7章で授業構成と展開、つまり、どのように英語授業を構想し、授業づくりを進め、これを教室場面で実践するのか、という問題を論じた。第8章ではさらにこれを音声・文法・語彙という言語要素の側面からの指導を、また第9章ではいわゆる4つの言語技能の側面からの指導を、それぞれ扱った。第10章では今後ますます大きな期待が寄せられている教育工学、視聴覚メディアの諸問題が述べられ、第11章では教育評価とテストをとりあげた。ひとつひとつの英語のよい授業をつくりあげようとするときに考慮すべきことをそれぞれの視点から説いているわけである。

おわりのIIIには第12章として教師教育、とりわけ教育実習に焦点をあわせ、その事前指導の一助ともなるべき内容を盛りこんだ。

そして巻末に、資料として平成元年3月告示の学習指導要領を高等学校、中学校ともに掲載し学習の便をはかるとともに、明治以後の英語教育史年表を添えた。ご参考になれば幸いである。

全体を通じ、英語教育の原論・原理的側面をふまえながら英語教育の実践をより確かなものにするのを心掛けたつもりである。

本書はこれから中学校や高等学校の英語教師をめざす人たちを念頭に置き、そのよい参考書としてお役に立つことを願って執筆された。英語教育学の内部

で何がどこまで研究されているのかを理解し、「より良い教師」たらんとする
方々の道標の役を少しでも果すことができれば幸いである。

最後になったが、本書の構成、編集、執筆にあたり、内外の研究者、教師、
識者の方々の先行研究から多大の学恩を受けたこと、および、お世話をして下
さった福村出版編集部の方々から厚いご配慮を頂きご尽力賜ったことに、心か
らお礼を申しあげる次第である。

1990年2月

松村幹男

目 次

まえがき

I 英語教育の歴史と教授原理

第 1 章	英語教育の歴史的概観		10
1	英語教育前史		10
2	明治・大正・昭和前期の英語教育		14
3	戦後の英語教育		20
第 2 章	英語の地位と英語教育目的論		26
1	諸英語教育目的論の概観		26
2	新しい時代の英語教育目的論		34
第 3 章	英語教材編成原理		38
1	英語教材編成原理の構築		38
2	シラバスの種類		40
3	シラバスの統合化		47
第 4 章	言語習得理論と英語学習		52
1	概 観		52
2	言語学習と母国語の影響		55
3	言語普遍性		60
4	言語習得理論の英語教育への貢献と今後の展望		63
第 5 章	学 習 者 論		67
1	学習者の実態・要望の把握		67
2	学習意欲と目的意識の育成		71

3 学習者中心の英語教育 76

第6章 各種教授法 | 81

1 教授法概観 81

2 Oral Method 85

3 Oral Approach 88

4 Cognitive Approach 92

5 Communicative Approach 95

II 授業の実践

第7章 授業の構成と展開 | 100

1 授業の構成 100

2 授業の展開 106

第8章 言語要素の指導 | 114

1 音声指導 114

2 文法指導 119

3 語彙の指導 124

第9章 4技能の指導 | 130

1 4技能の考え方 130

2 リスニング 134

3 スピーキング 139

4 リーディング 144

5 ライティング 148

第10章 視聴覚教育と教育工学 | 154

1 視聴覚教育と視聴覚メディア 154

2 視覚に訴えるメディア 157

3 聴覚に訴えるメディア 159

- 4 視聴覚に訴えるメディア 161
- 5 学習制御機能を持つメディア 164

第 11 章 教育評価とテスト | 168

- 1 英語教育における教育評価 168
- 2 外国語テスト 174

III 教師教育と教育実習

第 12 章 教師教育と教育実習 | 184

- 1 教育実習の意義と参加条件 184
- 2 授業実習 186
- 3 教育実習の評価 190

資料1-1 中学校学習指導要領 194

資料1-2 高等学校学習指導要領 200

資料2 英語教育史年表 206

索引

I 英語教育の歴史と教授原理

第 1 章 英語教育の歴史的概観

1 英語教育前史

漢学史・蘭学史

わが国における外国語・外国文化との接触の始まりは古く、一般には西暦285年に百済より王仁が来朝し、『論語』『千字文』を伝えた時にさかのぼるとされている。もちろん、「漢委奴国王印」の示すところにより、それ以前にもなんらかの形で交流があったことは十分想像しうるところであるが、文化的にはこの王仁来朝や6世紀における五経博士段楊爾の来朝、仏教の伝来を経て、607年に小野妹子を隋に派遣した時に始まる遣隋使、遣唐使の貢献によって本格的な中国語・中国文化の研究が推進された。これは遣唐使廃止後も続けられ、鎌倉・室町時代の五山文化などにみられる漢詩文の研究や江戸時代における朱子学、陽明学等の研究などを通して、わが国の文学史、思想史に大きな影響をおよぼした。この漢学研究の流れの中で、江戸幕府の官学である昌平黉や各地の藩黉、私塾で行われた素読、輪講などの方法が、後に蘭学、英学などの教授においても踏襲され、さらには返り点による漢文訓読の方法までが採り入れられることになる。

一方、西洋文明との接触は1543年にポルトガル商船が種子島に漂着した時に始まったが、江戸幕府による鎖国令以降は長崎の出島をとってオランダとのみ交易が行われ、この細々とした流れの中でやがて蘭学と呼ばれる学問が芽生えるのである。このオランダとの取引において通訳官兼商務官としての役目を果たし、父子相伝の家系とされた蘭通詞たちは、当初、口頭でのみオランダ語の学習が許されていたが、やがて読み書きの学習が認められるようになると独

自にオランダ語の研究をする者が現れ、1767年には通詞西善三郎が未完ながら蘭日辞書を編集し、さらに志筑忠雄（中野柳園）がオランダの書物を読むうちにオランダ語の文法規則を発見して『和蘭詞品考』を著すなどの成果をみた。

これに対し、幕府のお膝下江戸においては、1720年に徳川吉宗が禁書の令を緩和し、さらに青木昆陽、野呂元丈に蘭学研究を命じているが、これはごく初歩的なものにとどまった。江戸の蘭学研究が本格的になるのは1774年に前野良沢・杉田玄白・中川淳庵が『解体新書』を出版したところからである。彼らがほとんど何の手掛りもなく始めた蘭学研究は1788年、大槻玄沢が『蘭学階梯』を著して蘭学研究の方法を説くとわが国の文化史上に大きな流れとなつてうねり出した。

ここでこの蘭学を教育・研究した機関をみておくと、まず幕府のほうでは、1811年に天文台の中に蛮書和解御用が設置され、外国文書の翻訳にあたった。やがて、1855年にはこれが独立して洋学所となり、蘭書翻訳、蘭学講習の機関とされ、翌1856年にはその名称が蕃書調所と改められて「西洋学を専修し翻訳書の誤謬を正す所」と位置づけられた。当初、生徒は幕臣子弟に限られていたが、のち諸藩士に入学を許した。1860年には校舎の移転を機に学科目が蘭学・英学・仏学・独学・魯学・化学に拡張され、1862年に再び移転、洋書調所と改称され、さらに翌年開成所と変更された。この開成所は明治維新の際一時閉鎖されたが、のちに再開され、いくたびかの改組、改称を経て今日の東京大学となっている。

一方、各藩でも藩費の教学科目中に洋学、蘭学などを入れたり、独立の機関を設置したりするところがあり、長州の明倫館、尾張の洋学所、福井の明道館、大野の蘭学館などがある。さらに、私塾もいくつか開かれ、江戸では大槻玄沢の芝蘭堂、大坂に緒方洪庵の適塾、長崎にはシーボルト（Siebold, P.）の鳴滝塾などがあり、緒方洪庵の適塾における蘭学教授・学習の様子は、福沢諭吉の『福翁自伝』や長与専斎の『松香私志』などに詳しい。

英 学 史

わが文化史上に初めて登場するイギリス人はウィリアム・アダムズ（William Adams）で、彼は1600年に豊後の臼杵湾に漂着したオランダ商船リーフデ号に

航海長として乗り組んでおり、のち徳川家康の外交・貿易顧問として重用された。1613年にはイギリスよりクローブ号が平戸に入港し、ジョン・セーリス (John Saris) がジェームズ1世の親翰をもたらししたが、アダムズはこれを家康の前で和訳し、さらに漢文による家康の返書を英語に訳している。これは本邦初の英文和訳、和文英訳ということになるが、残念ながらアダムズが日本人に英語を教えた形跡はなく、英語教育史という観点からはみるべきものは少ないといえよう。

英語の教授・学習という形が最初にとられたきっかけとなったのは1808年に起きたフェートン号事件である。これはイギリス船フェートン号が長崎に入津、乱暴狼藉をはたらき、時の長崎奉行松平図書頭康英が引責自刃するにいたった事件であるが、この時、蘭通詞の中にひとりとして英語を解する者がなかったので、英語研究の要を痛感した幕府が翌1809年2月に本木庄左衛門ら6名の蘭通詞に、のち追加して10月付けで蘭通詞全員に、英・露語兼学の命を下したものである。彼らが師としたのはオランダ商館長ゾーフの副官で、英語を解したヤン・コック・ブロムホフ (Jan Cock Blomhoff) であった。彼らは、本木の父良永がオランダ人より借りて筆写してあった蘭英対訳の会話書を携えてブロムホフに質問し、また彼の蔵する書物によって英語をABCより学んだ。ブロムホフのとった教授法は通詞たちが彼の面前で口頭で質問し、彼がそれに答えるという形のもので「面命口授」と呼ばれている。この蘭通詞による英語学習の成果は1811年に英和対訳の単語・短句集『諸厄利亜興学小笈』10巻として著され、次いで最初の英和辞典『諸厄利亜語林大成』15巻が1814年に完成された。『語林大成』の巻頭凡例には英文法の略述がおさめられ、わが国で初めて英文法を説いたものであった。これらはともに写本で、ひろく世に行われることはなかったが、英学研究の出発を飾るにふさわしい成果であった。

長崎の英学研究にもうひとつ開いた大輪はラナルド・マクドナルド (Ranald McDonald) であった。スコットランド人を父に、アメリカ・インディアンの酋長の娘を母にもつマクドナルドは失恋を機にアメリカ・インディアンの父祖の国と信じていた日本に行こうと捕鯨船プリマス号に乗り組み、1848年7月北海道利尻島に擬装漂着を果たした。そして10月には長崎に護送され、取り調べのち大悲庵に幽閉されるが、翌1849年4月アメリカ船プレブル号に引き渡され

て帰国するまでの7ヵ月間、蘭通詞森山栄之助、堀達之助など14名に英語を教えている。その教え方は通詞ひとりが彼に英語を読んで聞いてもらって発音を訂正してもらうというものであったが、このマクドナルドこそまさしく native speaker の英語教師第1号であった。

一方、江戸においてはすでに述べたように、1860年、蕃書調所が小川町に移されたのを機に、従来の蘭学講習に英学が他の語学、化学とともに加えられ、竹原勇四郎、千村五郎が英学句読教授出役、堀達之助が教授手伝の任にあたったが、これより先、1841年には渋川敬直が『英文鑑』を著している。これは英米において一世を風靡したリンドレー・マレー (Lindley Murray) の英文法書をオランダ語に訳したものを重訳したもので、まとまった英文法書としては最初のものであった。しかし、これもわずかに3部が浄書されたのみで世に出されず、維新前の英学研究に裨益した英文法書としては、1850年代後半から1860年代にかけて出された美作宇田川氏による『英吉利文典』、越前大野文庫蔵版にかかる『英吉利文典』、手塚律蔵・西周助の『伊吉利文典』、蕃書調所が出版した『英吉利文典』などを待たねばならなかった。蕃書調所 (のち洋書調所、開成所) はこのほかにも『英語階梯』、『英語訓蒙』、『英吉利単語篇』などの入門書を出版し、さらに語学研究の最重要の道具たる辞書も堀達之助を編集主任として『英和对訳袖珍辞書』を編みしめ、1862年これを刊行した。

このようにして軌道にのった英学研究は急速に進展し、幕末から明治初頭にかけて辞書や文法書、綴字書、読本などが陸続と上梓され、辞書ではヘボンの手による『和英語林集成』(1867年)、前述『対訳袖珍』の海賊版で「薩摩辞書」の名で呼ばれる『和訳英辞書』(1869年)、柴田昌吉・子安峻の『附音挿図英和字彙』(1873年) などがあり、文法書ではクワッケンボス (Quackenbos, G. P.), ピネオ (Pinneo, T. S.) などがその主なもので、綴字書はウェブスター (Webster, N.) のスペリング・ブックに代表される。

また、教育機関としては幕府の開成所のほか、長崎の英語伝習所、神奈川の英学校、箱館の稽古所があり、また各地の藩費でも課程中に英語を加えたり、さらに外人教師を雇傭するところがあった。さらに、私塾の方では、福沢諭吉の慶応義塾 (この名称は1868年から) が1862年に英書の読方教授を開始しており、維新後は多くの洋学、英学私塾が創設された。そのうち代表的なものとし

ては慶応義塾のほか、尺振八の共立学舎、箕作秋坪の三叉学舎、中村正直の同人社などが挙げられる。

2 明治・大正・昭和前期の英語教育

学 制 頒 布

日本の近代学校教育の淵源は1872（明治5）年に頒布された「学制」にさかのぼることができるが、これまでの維新政府の教育政策を簡単にみておくと、まず1868年3月、京都に学習院が再興され、6月には昌平学校の復興、医学所の設置をみ、9月には開成所が復興された。翌年6月にはこの昌平学校を大学校とし、さらに12月にはこれを大学と改めて全国のエ育事務を統轄せしめ、開成所を大学南校、医学所を大学東校と改めた。1871年2月、外務省は洋語学所（独・魯語）、漢語学所（清語）を設置した。7月には大学が廃されて文部省が設けられ、大学南校、大学東校はそれぞれ南校、東校となってその直轄下に置かれた。さらに同年8月、工部省の工学寮が、翌年3月には開拓使仮学校がそれぞれ設置されている。このような一連のエ育施策をうけて、1872年8月「学制」が頒布されるが、この時にあたって布告された「学事奨励に関する被仰出書」には「^{むら}邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」と謳われている。

この「学制」によって、全国は8大学区に、各大学区は32中学区に、各中学区は210の小学区に分けられ、各学区にそれぞれ大学校、中学校、小学校が1校ずつ設けられることとなった。小学、中学はそれぞれ下等、上等に分かれたれ、修業年限は小学の各等4ヵ年、中学の各等3ヵ年で、下等小学は6歳より入学するものとされた。教科目については、下等小学では14教科、上等小学ではそれに4教科が加わり、さらに「其地ノ形情ニ因テハ学科ヲ拡張スル為メ左ノ四科ヲ斟酌シテ教ルコトアルヘシ」としてその四科のひとつに「外国語ノ一」が挙げられている。中学の教科目は下等16教科、上等15教科となり、それぞれ「外国語学」がそのひとつに数えられている。しかし、この「学制」はあまりにも理想に傾き、実際には教師、教科書、設備いずれの面においても十分整わず、教育の普及をねらいながらもさまざまな問題点を抱え、そこに規定された事柄

も十全な形では実施されないまま、1879年に「教育令」が制定されるや、廃止されることとなる。

官立外国語学校・英語学校

この「学制」による教育制度下、政府は1873年より外国語学校を設置することとなり、まず、同年5月、開成所の英・仏・独語科と外務省の洋語学所・漢語学所を併せて東京外国語学校を設けた。次いで、翌1874年3月、愛知、広島、新潟、宮城に、4月には大阪、長崎にそれぞれ外国語学校を増設した。しかるに、生徒の中には英語を専攻する者がはなはだ多く、1874年12月、東京外国語学校の英語科を分離独立させて東京英語学校とし、東京外国語学校はこののち仏・独・魯・清語を教授するところとなった。また、同じく愛知、広島、新潟、宮城、大阪、長崎の外国語学校を英語学校と改め、もっぱら英語をもって教授するところとなった。これらの学校の目的とするところは、たとえば大阪英語学校のように、「当校ハ英語学校ニシテ語学ヲ志スモノヲ教授スルノミナラス又専門諸科ニ入ラント欲スルモノヲ教授ス」（『学則』明治8年3月改正）としているものと、長崎英語学校のようにこの前段を欠いて単に「本校ハ大学校ニ入ラント欲スル者ニ英語ヲ以テ普通学科ヲ教授ス」（『長崎英語学校規則』明治9年1月）と規定しているものがある。いずれにせよ、外国語で教育が行われた東京開成学校などの上級学校に進学する者のための予備学校的性格を有していたわけである。明治時代に各分野に活躍した人々の中にはこれら外国語学校・英語学校に学んだ人も多く、東京英語学校では高田早苗、田中館愛橘、愛知英語学校の坪内逍遙、三宅雪嶺、広島英語学校に学んだ大和田建樹などが有名である。

しかし、1877年、西南戦争に多大の出費を要した政府はこれらの英語学校を廃することとし、2月に愛知、広島、長崎、新潟、宮城の各英語学校を廃止、それぞれ地方庁の経営に移管せしめた。東京英語学校については同年4月、東京大学開設に伴って東京大学予備門と改称して、大学専門科に入る予修を施すところとなった。これはのち第一高等中学校、第一高等学校となった。一方、大阪英語学校は1879年4月に大阪専門学校と改められ、これも後に大阪中学校となり、さらに第三高等中学校、第三高等学校となっている。